

Paribhāṣenduśekhara 50: asiddham bahiraṅgam antaraṅge 研究 (3)

間瀬 忍

本稿は、前々稿¹、前稿²に続き、18世紀のパリーニ文法家ナーゲーシャ・バツタによって著された『パリバーシェンドウシェーカラ』、解釈規則 50: asiddham bahiraṅgam antaraṅge (以下、antaraṅga 解釈規則と表記) の翻訳研究を提示するものである。

ナーゲーシャは、同解釈規則の解釈と必要性を検討し、さらに同解釈規則の基本概念である *anṅa* の概念を明らかにした後、この解釈規則がパリーニによって P.6.4.132 に *ūTH* を言及することによって示唆されているという問題の検討に入る。antaraṅga 解釈規則の必要性が P.6.4.132 の *ūTH* によって示唆されるという見解はパタンジャリがすでに明示したものであるが、ナーゲーシャはこのパタンジャリの見解がいかに正当化されるべきか詳細に論じている。本稿が提示する翻訳研究の対象はまさにこの問題の検討箇所である。

【2.3.2. P.6.4.132 の *ūTH* によって確立される antaraṅga 性】

【2.3.2.1. 複合語の派生における antaraṅga 性】

ata evomānoś ca (P.6.1.95) ity āṅgrahaṇam caritārtham / tad dhi khaṭvā ā ūdhety atra param api savarṇadīrgham bādhitvāntaraṅgatvād guṇe kṛte vṛddhiprāptau pararūpārtham / sādhanabodhaka-pratyayotpattyanantaram pūrvaṃ dhātor upasargayoge paścāt khaṭvāsabdasya samudāyena yogād guṇasyāntaraṅgatvam iti samprasāraṅac ca

(P.6.1.108) iti sūtre bhāṣye spaṣṭam / ehīty anukaraṇasya śivādīśabdasambandhe tu nāsyā pravṛttir jñāpakaparasaṃprasāraṅac ceti sūtrasthabhāṣyaprāmāṇyenānityaṃ prakṛtivad anukaraṇam ity atideśam ādāya labdhāntva etadapravṛtteḥ //

[P.6.4.132 における *ūTH* の言及は先に結合される要素を根拠とする操作は後で結合される要素を根拠とする操作に対して antaraṅga であることを示している] まさにこのことから³、

³ 「このことから」(ataḥ) という理由句の「このこと」が何を指すのからに関して筆者は Kielhorn の解釈に賛成できない。

Kielhorn は、「このこと」は、2.1 節【antaraṅga 解釈規則の意味】(間瀬 [2006a: 81]) antaraṅge kartavye jātam tatkālyaprātikam ca bahiraṅgam asiddham ity arthaḥ (「antaraṅga [の適用] が実現されるべきとき、既に生じている (jāta) bahiraṅga、あるいはその [antaraṅga] と同時に結果する (tatkālyaprātika) bahiraṅga [の適用] はまだ成立していない」) の論点を指示すると解し、antaraṅga と同時に適用可能な bahiraṅga も asiddha であることが、P.6.1.95 omānoś ca における *āN* の言及が意味をなすことの理由であると理解する。P.6.4.132 における *ūTH* が、先に起こる要素 *NvI* を根拠とする P.7.3.86 による「*guṇa*」代置が後で起こる要素 *vāh* を根拠とする P.6.4.132 による *ūTH* 代置に対して antaraṅga であることが示されていることを受けて、「このこと [P.6.4.132 における *ūTH* によって先に導入される要素を根拠とする操作が後で導入される要素を根拠とする操作に対して antaraṅga であることが示される] から」と解釈する。

P.6.4.132 における *ūTH* の言及は、先に起こる要素 *NvI* を根拠とする P.7.3.86 による「*guṇa*」代置は、後で起こる要素 *vāh* を根拠とする P.6.4.132 による *ūTH* 代置に対して antaraṅga であることを示している。より一般化して言えば、*ūTH* の言及は、先に導入される要素を根拠とする操作が後で導入される要素を根拠とする操作に対して antaraṅga であることを示しているのである。以下の議論は、P.6.1.101 による「*dīrgha*」代置に対して、P.6.1.87 による「*guṇa*」代置は antaraṅga であることが前提となっている。この「*guṇa*」代置の antaraṅga たることを根拠

¹ 間瀬 [2006a]

² 間瀬 [2007]

P.6.1.95 omānoś ca における $\bar{a}N$ という言及は意味をなす。なぜなら次のように言うことができるからである。[*khaṭvodhā*「タンカで運ばれた女性」の派生の] *khaṭvā+ā+ūḍha* というこの[段階]で、[P.6.1.87よりP.6.1.101が]後続規則であるにも関わらず [P.6.1.87が] P.6.1.101 *akaḥ savarṇe dīrghaḥ* を阻止した後、*antaraṅga* であることから「*guṇa*」代置が適用される。そしてこの「*guṇa*」代置が適用された後、[P.6.1.89による]「*vṛddhi*」代置が適用可能となる。その [$\bar{a}N$ という言及] は、このときの [P.6.1.95による] 後続する形 [*o* の代置] を目的としている⁴。

付けるものこそがこの $\bar{u}TH$ の言及によって示唆されるものである。間瀬 [2006b] 参照。

⁴ [*khaṭvodhā* の派生]

- | | | |
|------|--------------------------------------|-----------|
| (1) | <i>khaṭvā + āN + vah + Kta + TāP</i> | P.2.4.71 |
| (2) | <i>khaṭvā + ā + uah + ta + ā</i> | P.6.1.15 |
| (3) | <i>khaṭvā + ā + uh + ta + ā</i> | P.6.1.108 |
| (4) | <i>khaṭvā + ā + udh + ta + ā</i> | P.8.2.31 |
| (5) | <i>khaṭvā + ā + udh + dha + ā</i> | P.8.2.40 |
| (6) | <i>khaṭvā + ā + udh + dha + ā</i> | P.8.4.41 |
| (7) | <i>khaṭvā + ā + u + dha + ā</i> | P.8.3.13 |
| (8) | <i>khaṭvā + ā + ū + dha + ā</i> | P.6.3.111 |
| (9) | <i>khaṭvā + ā + ū + dhā</i> | P.6.1.101 |
| (10) | <i>khaṭvā + o + dhā</i> | P.6.1.87 |
| (11) | <i>khaṭvodhā</i> | P.6.1.95 |
- khaṭvodhā*

[派生説明]

(1)の段階でP.2.4.71により $Tā$ と sU が脱落する。(2)の段階でP.6.1.15により *Kta* が後続する *vah* の v に「*saṃprasāraṇa*」 u が代置される。(3)の段階でP.6.1.108により「*saṃprasāraṇa*」 u とそれに後続する母音 a に先行要素 u が唯一代置される。(4)の段階でP.8.2.31により *jhaL* である t が後続する *uh* の h に dh が代置される。(5)の段階でP.8.2.40により *jhaṣ* である dh に後続する t に dh が代置される。(6)の段階でP.8.4.41により dh に後続している dh に dh が代置される。(7)の段階でP.8.3.13により dha に先行する udh の dh が脱落する。(8)の段階でP.6.3.111により(7)の段階でP.8.3.13により脱落した dh の先行要素である u に \bar{u} が代置される。(9)の段階でP.6.1.101により $\bar{u}dha$ の a とそれに後続する $TāP$ の同類母音 \bar{a} に長音 \bar{a} が唯一代置される。(10)の段階でP.6.1.87により $\bar{a}N$ の \bar{a} とそれに後続する母音 \bar{u} に「*guṇa*」が唯一代置される。(11)の段階で、(10)の段階で結果した代置要素「*guṇa*」である o はP.1.1.56により $\bar{a}N$ の \bar{a} とみなされるからP.6.1.95が適用され、*khaṭvā* の \bar{a} とそれに後続する o に後続要素 o が唯一代置されて、*khaṭvodhā* が派生される。

[関連規則]

P.2.4.71 *supo dhātuprātipadikayoḥ* // (「*dhātu*」(動詞語根)という術語で呼ばれるものと「*prātipadika*」(名詞語幹)という術語で呼ばれるものの内部に含まれる sUP に

行為実現要素 (*sādhana*) を理解せしめる接辞 (*Kta*) が生起した直後にまず動詞語根 (*vah*) が「*upasarga*」($\bar{a}N$)と結合し、その後、*khaṭvā* という語が [*odhā* という語] 全体と結合する。したがって「*guṇa*」代置は *antaraṅga* である。このことは、P.6.1.108 *saṃprasāraṇac ca* というストラに関する *Bhāṣya* において明らかである⁵。

脱落が起こる)

P.6.1.15 *vacisvapiyajādīnām kiti* // (「*vac*, *svap*, *yaj* 群の動詞語根に K を it として持つ接辞が後続するとき、それらの動詞語根の半母音の代わりに「*saṃprasāraṇa*」が起こる)

P.6.1.108 *saṃprasāraṇac ca* // (「「*saṃprasāraṇa*」に母音が後続するとき、先行要素と後続要素の代わりに先行要素が唯一代置される)

P.8.2.31 *ho dhaḥ* // (「*jhaL* が後続するとき、あるいは「*pada*」の最終要素であるとき、 h の代わりに dh が起こる)

P.8.2.40 *jhaṣas tathor dho dhaḥ* // (動詞語根 $dhā$ の場合を除いて、*jhaṣ*の後続要素である t と th の代わりに dh が起こる)

P.8.4.41 *ṣṭunā ṣṭuḥ* // (「 s 音と t 系列音が \bar{s} 音と t 系列音に隣接するとき s 音と t 系列音の代わりに \bar{s} 音と t 系列音が起こる)

P.8.3.13 *dho dhe lopah* // (「 dh に dh が後続するとき先行する dh が脱落する)

P.6.3.111 *dhralope pūrvasya dīrgho naḥ* // (「 dh あるいは r の脱落がおこったとき、 dh あるいは r の先行要素であった aN の代わりに「*dīrgha*」が起こる)

P.6.1.101 *akaḥ savarṇe dīrghaḥ* // (「 aK に同類音である母音が後続するとき、先行要素の aK と後続要素の母音の代わりに「*dīrgha*」が唯一代置される)

P.6.1.87 *ād guṇaḥ* // (「 a 音に母音が後続するとき、その先行する a 音と後続する母音の代わりに「*guṇa*」が唯一代置される)

P.1.4.59 *upasargāḥ kriyāyoge* // (「*pra* 群の語が行為を表示する語と結合するとき「*upasarga*」という術語で呼ばれる)

P.6.1.95 *omānoś ca* // (「 a 音を最終要素とするものに om と $\bar{a}N$ が後続するとき先行要素と後続要素の代わりに後続要素が唯一代置される)

⁵ 【本文の解説】P.6.1.108 に関する *Bhāṣya* によると、P.6.1.95 における *āni parārūpam* 「 $\bar{a}N$ が後続するとき後続形が [代置される]」という規定は、先に起こるべき要素を根拠とする操作が後で起こるべき要素を根拠とする操作に対して *antaraṅga* であり、*antaraṅga* が *bahiraṅga* に対して強い力を持つことを示す指標である。その理由を以下に説明する。

上の派生で示したように、*khaṭvā* と *odhā* の複合語である *khaṭvodhā* が派生されるとき、 $\bar{a}N$ は動詞語根 i の意味を限定する「*upasarga*」であるから、*khaṭvā* と結合されるより先に $\bar{u}dha$ と結合する。この場合、動詞語根が「*upasarga*」と結合された後でその動詞語根と「*upasarga*」の複合体と結合される要素である *khaṭvā* の \bar{a} を根拠とする P.6.1.101

しかし、[*ehi* (*ā+ihī*, 「来い」; *āN-i*, 2nd sg. imperative) の] 模写音 (*anukaraṇa*) が *śiva* などの語と関係するとき、この [P.6.1.95] の適用はおこらない。

なぜなら、[P.6.1.95 における *āN* の言及は、先に結合される要素を根拠とする操作が後で結合

による「*dirgha*」代置に対して、先に結合される *ūdhā* の *ū* を根拠とする P.6.1.87 による「*guṇa*」代置は *antarāṅga* である。したがって、「*guṇa*」代置が「*dirgha*」代置に先行して適用される。P.6.1.95 に *āN* を言及し、「*āN* が後続するとき後続形が [代置される]」と規定することの目的は、この「*guṇa*」代置が適用された後に P.6.1.95 を適用を招来することなのである。もし「*upasarga*」*āN* が *ūdhā* の動詞語根に結合するより先に *khaṭvā* と結びつくとすれば、P.6.1.95 による *āN* が後続するときの後続形の代置操作は適用機会を持たず、同規則中の *āN* の言及は無意味となるであろう。

カーティアーヤナは P.6.1.108 に対する第 9 *vārttika* で P.6.1.95 の *a* 音で終わる項目に *āN* が後続するとき後続要素が唯一代置されるという規定は、*antarāṅga* が *bahiraṅga* より強力であることを示唆すると述べている (vt. 9 on P.6.1.108: *āni pararūpavacanam tu jñāpakam antarāṅgabaliyastvasya*)。この *vārttika* をパタンジャリは次のように説明している。

MBh on P.6.1.108 (III. 83.25-84.2): *etaj jñāpayaty ācāryo 'ntaraṅgaṃ baliyo bhavātīti / kiṃ punar ihāntaraṅgaṃ kiṃ bahiraṅgaṃ yāvatā dve pade āśritya savarṇadīrghatvam api bhavaty ād guṇo 'pi / dhātūpasargayor yat kāryam tad antarāṅgam / kuta etat / pūrvam upasargasya hi dhātunā yogo bhavati, nādyāśabdena / kim arthaṃ tarhy adyāśabdhāḥ prayujyate / adyāśabdasyāpi samudāyena yogo bhavati //*

(「師 [パーニニ] は次のこと、すなわち、*antarāṅga* は [*bahiraṅga*] より強力であるということを知らしめている。

[問] しかしこの場合、二つの「*pada*」に依拠して P.6.1.101 による同類音に対する「*dirgha*」代置も起こり、P.6.1.87 による *ā* に後続するものの「*guṇa*」代置も起こるといふ限りで、何が *antarāṅga* で何が *bahiraṅga* であるのか。

[答] 動詞語根と「*upasarga*」に関する操作が *antarāṅga* である。

[問] どうしてこう言えるのか。

[答] なぜなら、[*adyodhā* (「今運ばれた女性」、*adya+ā+ūdhā*) において] まず「*upasarga*」が結合するのは動詞語根であって *adya* という語ではないからである。

[問] それでは何のために *adya* という語が使用されるのか。

[答] *adya* という語もまた [「*upasarga*」と動詞語根の] 集合と結合する]

この *Bhāṣya* がナーゲーシャがここで意図している *Bhāṣya* である。

される要素を根拠とする操作に対して *antarāṅga* であるということの] 指標 [であること] を意図した、P.6.1.108 *samprasāraṅca* というスートラに関する *Bhāṣya* の権威によって、普遍妥当性をもたない解釈規則「模写音は原音と同様に扱われる」(PIŚ36: *prakṛtivad anukaraṇam*) による拡大適用に依拠して [模写音 *ehi* の *e* が] *āN* と見なされる場合、この [P.6.1.95 の規則] は適用されないからである⁶。

⁶ [本文の解説] すでに述べたように、P.6.1.95 における *āni pararūpam* 「*āN* が後続するとき、後続要素の形が [代置される]」という規定は、ある要素に対して先に結合されるべき要素を根拠とする操作が後で結合されるべき要素を根拠とする操作に対して *antarāṅga* であり、それが *bahiraṅga* より強い力を持つことを示す指標である。

以下の *śivehi* の派生においては、*siva* と *ā-i* の二人称単数命令形「*parasmaipada*」の *ehi* が関係している。この場合、*āN* は、動詞語根 *i* の意味を限定する「*upasarga*」として *siva* より先に二人称単数命令形 *ihī* の動詞語根 *i* と結合される。そのため、後で結合される要素である *siva* の *a* を根拠とする P.6.1.89 による「*dirgha*」代置に対して先に結合される *ihī* の *i* を根拠とする P.6.1.87 による「*guṇa*」代置は *antarāṅga* であり、したがって「*guṇa*」代置が「*dirgha*」代置に先行して適用される。

[*śivehi* (2nd. sg imperative) 「シヴァよ、来い」]

- | | | |
|-------------------|-----------------------------------|-----------|
| (1) <i>siva</i> + | <i>āN</i> + <i>i</i> + <i>IOṬ</i> | P.3.3.162 |
| (2) <i>siva</i> + | <i>āN</i> + <i>i</i> + <i>siP</i> | P.3.4.78 |
| (3) <i>siva</i> + | <i>ā</i> + <i>i</i> + <i>hi</i> | P.3.4.87 |
| (4) <i>siva</i> + | <i>e</i> + <i>hi</i> | P.6.1.87 |
| (5) <i>śivehi</i> | | P.6.1.95 |

śivehi

[派生説明]

(1) の段階で P.3.3.162 により動詞語根 *i* に命令法接辞 *IOṬ* が導入される。(2) の段階で P.3.4.78 により *IOṬ* に二人称単数「*parasmaipada*」の代置要素である *siP* が代置される。(3) の段階で *siP* は *IOṬ* の代置要素であるので P.3.4.87 により *siP* に *hi* が代置される。(4) の段階で P.6.1.87 により *āN(e)* とそれに後続する母音である *i* の両者の代わりに「*guṇa*」である *e* が唯一代置される。(5) の段階で P.6.1.95 により *siva* の *a* とそれに後続する *āN(e)* の両者に後続要素 *e* が唯一代置され、*śivehi* が派生される。

ここでナーゲーシャは P.6.1.95 における *āN* の言及に関するある反論を想定している。それは、*āN* の言及は、上述の *antarāṅga*-*bahiraṅga* に関することを示唆するためではなく、*siva* と模写語 *ehi* の複合語において、P.6.1.88 によって *siva* の *a* と模写語 *ehi* の *e* の両者に「*vṛddhi*」である *ai* が唯一代置されることを阻止するためであるというものである。

この反論は、P.6.1.95 における *āN* の言及は、先に結合される要素を根拠とする操作が後で結合される要素を根拠とする操作に対して *antarāṅga* であるということの指標であるということを意図した、P.6.1.108 *samprasāraṅca* というスートラに関する *Bhāṣya* の権威を認めるならば、否定される。模写語の *ehi* は、模写語に関する解釈

【2.3.2.2. 「upasarga」-動詞語根-接辞の結合に関する antaraṅga 性】

【2.3.2.2.1. 「upasarga」-動詞語根-行為実現要素を表示する接辞】

【2.3.2.2.1.1. 「upasarga」を根拠とする操作が行為実現要素を表示する接辞を根拠とする操作に対して antaraṅga であるという反論】

yat tu pūrvaṃ dhātur upasargeṇa yujyate paścāt sādhanena / upasargeṇa tatsaṃjñakaśabdena / sādhanena kāraṇeṇa tatprayuktakāryeṇa / ata evānu-bhūyata ityādau sakarmakatvāt karmaṇi lakārasiddhir iti tan na /

【反論】しかし、動詞語根は先に「upasarga」と結合し、後で行為実現要素〔を表示する接辞〕と〔結合する〕。「upasarga」とはそれ〔「upasarga」〕という術語をもつ語のことである。行為実現要素とは行為参与者 (kāraṇa) のことであり、その〔行為参与者が〕引き起こす文法操作のことである。

まさにこのことから *anubhūyate* (「経験される」*anu-bhū*, 3rd. sg. pres. P.) など〔の事例〕において、〔「upasarga」である *anu* と結びついた動詞語根 *bhū* は〕他動詞 (sakarmaka) であ

規則によって *āN* で始まるものと見なし得るとしても、実際には、それは antaraṅga である操作が適用されたことによって派生された語形ではないからである。*śiva* と模写語 *ehi* の複合語において、P.6.1.95 は適用されない。

【関連規則】

P.3.3.162 *loṭ ca* // (「動詞語根の後に命令法接辞 *IOṭ* が起こる」)

P.3.4.78 *tiptasjhisipthasthamibvasmastātāmjhathāsāthāmdhvamiḍvahiṃ* // (「*L* 音の代わりに、*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*, *āthām*, *dhvam*, *iṭ*, *vahi*, *mahiN* という代置が起こる」)

P.3.4.87 *ser hy apic ca* // (「*IOṭ* の代置要素である *siP* の代わりに *hi* が起こる。そしてそれは *P* を *it* として持たない」)

P.6.1.87 *ād guṇaḥ* // (「*a* 音に母音が後続するとき、その先行する *a* 音と後続する母音の代わりに、「*guṇa*」が唯一代置される」)

P.6.1.95 *omānoś ca* // (「*a* 音を最終要素とするものに *om* と *āN* が後続するとき先行要素 *a* と後続要素の代わりに後続要素が唯一代置される」)

P.6.1.89 *etyedhatyūthsu* // (「*a* 音に *eC* ではじまる *i*, *edh* という動詞語根、あるいは *ūTH* が後続するとき、先行要素と後続要素の代わりに「*vrddhi*」が唯一代置される」)

P.6.1.88 *vrddhir eci* // (「*a* 音に *eC* が後続するとき、その先行する *a* 音と後続する *eC* の代わりに「*vrddhi*」が唯一代置される」)

るので、行為の目的 (karman) を表示する *L* 音の導入が成立する⁷。

【2.3.2.2.1.2. 行為実現要素を表示する接辞を根拠とする操作が「upasarga」を根拠とする操作に対して antaraṅga であるという答論】

kriyāyāḥ sādhyatvena bodhāt sādhyasya ca sādhanākāṅkṣatayā tatsaṃbandhottaram eva niścitakriyābodhena sādhanakāryapravṛtṭyuttaram eva kriyāyoganimittopasargasamjñakasya sambandhaucityāt / ata eva suṭ kāt pūrvaḥ (P.6.1.135) iti sūtre pūrvaṃ dhātur upasargeṇety uktvā naitat

⁷【本文の解説】反論者は以下のように主張している。動詞語根 *bhū* は、ゼロ「upasarga」では「存在する」を意味する自動詞であり、「upasarga」*anu* が先行するとき「経験する」を意味する他動詞である。したがって、*bhū* は先に「upasarga」である *anu* と結合されなければ行為の目的を表示する接辞と結合できない。動詞語根は先に「upasarga」と結合し、その後行為実現要素を表示する *L* 接辞と結合すると考えるのが妥当である。

反論者の主張に従って *anubhūyate* を派生すると以下のようなになる。

【*anubhūyate* の派生：1】

- | | | | |
|----------------|---|-------------------------------------|--------------------------------|
| (1) <i>anu</i> | + | <i>bhū</i> | |
| (2) <i>anu</i> | + | <i>bhū</i> | + <i>IAṭ</i> P.3.2.123 |
| (3) <i>anu</i> | + | <i>bhū</i> | + <i>ta</i> P.3.4.78, P.1.3.13 |
| (4) <i>anu</i> | + | <i>bhū</i> | + <i>te</i> P.3.4.79 |
| (5) <i>anu</i> | + | <i>bhū</i> + <i>yaK</i> + <i>te</i> | P.3.1.67 |

anubhūyate

【派生説明】

(1) の段階で動詞語根 *bhū* が「upasarga」である *anu* と結合される。(2) の段階で P.3.2.123 により現在接辞 *IAṭ* が導入される。(3) の段階で P.3.4.78 と P.1.3.13 により、*IAṭ* の代わりに「*ātmanepada*」の代置要素である *ta* が代置される。(4) の段階で P.3.4.79 により「*ātmanepada*」の最後の母音に *e* が代置される。(5) の段階で P.3.1.67 により行為の目的を表示する「*sārvadhātuka*」*te* が後続している *bhū* の後に *yaK* が起こり、*anubhūyate* が派生される。

【関連規則】

P.3.2.123 *vartamāne laṭ* // (「現在に属する行為を表示する動詞語根の後に *IAṭ* 接辞が起こる」)

P.3.4.78 *tiptasjhisipthasthamibvasmastātāmjhathāsāthāmdhvamiḍvahiṃ* // (「*L* 音の代わりに、*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*, *āthām*, *dhvam*, *iṭ*, *vahi*, *mahiN* という代置が起こる」)

P.1.3.13 *bhāvakarmanoh* // (「行為と行為の目的が表示されるべきとき、「*ātmanepada*」が起こる」)

P.3.4.79 *ṭita ātmanepadānām ṭer e* // (「*ṭ* を *it* として持つ *L* 音の代置要素である「*ātmanepada*」の「*ṭi*」(最終母音ではじまる音節)の代わりに *e* が起こる」)

P.3.1.67 *sārvadhātuke yak* // (「行為と行為目的を表示する「*sārvadhātuka*」が後続するとき、動詞語根の後に *yaK* 接辞が起こる」)

sāraṃ pūrvaṃ dhātuḥ sādhanena yujyate paścād
 upasargeṇety uktvoktayuktyāyaiva yuktatvam
 uktaṃ sādhanam hi kriyāṃ nirvartayatīyādīnā /
 upasargadyotyārthāntarbhāveṇa dhātunaivārthā-
 bhidhānād ukteṣu karmaṇi lakārādisiddhiḥ /
 paścāc chrotubodhāya dyotakopasargasamban-
 dhah //

【答論】その考えは正しくない。[その理由は以下の通りである。]

行為は実現対象 (sādhyā) として理解されるから、そして実現対象というものは実現手段 (sādhanā) を期待するものであるから、[行為はまず] その [行為実現要素] と関係する。まさに [このように行為が行為実現要素と関係した] 後に [行為主体によって限定された行為あるいは目的に限定された行為という] 特定の行為が理解されることによって、行為実現要素によって [引き起こされる] 文法操作が起こる。まさにこの後で、行為との結合を根拠として「upasarga」と呼ばれる [語が動詞語根と行為実現要素を表示する接辞の結合体と] 関係する、と考えるのが適切である。

まさにこのことから、P.6.1.135 suṭ kāt pūrvaḥ というストラに関する [Bhāṣya においてパタンジャリは]、「動詞語根はまず「upasarga」と [結合する]」と述べられたのに対して、「この考えは健全ではない。動詞語根はまず行為実現要素 [を表示する接辞] と結合し、次に「upasarga」と結合する」と述べて、上述の道理によりまさにこの [後者の] 考えこそが合理的であるということ、「実に行為実現要素は行為を実現する、云々」といった言明を通じて述べている⁸ 上述 [の *anubhūyate* 等の事例] にお

⁸パタンジャリは次のように述べている。

MBh on P.6.1.135 (III. 93.23-25): naitatsāraṃ / pūrvaṃ dhātuḥ sādhanena yujyate, paścād upasargeṇa / sādhanam hi kriyāṃ nirvartayati, tām upasargo viśinaṣṭi / abhinirvṛttasya cārthasyopasargeṇa viśeṣaḥ śakyo vaktum /

(「この考えは健全ではない。動詞語根はまず行為実現要素 [を表示する接辞] と結合し、その後で「upasarga」と結合する。実に行為実現要素は行為を実現するものであり、その [行為] を「upasarga」が限定する。そして、実現される対象 [である行為] の限定は「upasarga」によって表示され得る」)

いては、「upasarga」によって標示されるべき意味を内包するまさに動詞語根そのものによって [経験等の] 意味が表示されるから、行為の目的を表示する L 音など [の導入] が成立する。[L 音が導入された] 後に、[内包する意味を] 聞き手に理解させるために、[動詞語根がそれを] 標示する「upasarga」と関係付けられる⁹。

【2.3.2.2.1.3. 例外的に「upasarga」を根拠とする操作が antaraṅga となる場合】

evaṃ cāntaraṅgatarārthakopasarganimittaḥ suṭ
 samkṛtīyavasthāyāṃ dvitvāditaḥ pūrvaṃ pravartate
 tato dvitvādi //

そしてこのような場合、[*samcaskāra* (*sam-kṛ* 「飾る」3rd. sg. perf. P.) の派生の] *sam+kṛ+ti* という段階で、[行為実現要素を表示する接辞を根拠とする操作と比較して] より antaraṅga である [動詞語根の] 意味を [標示する] 「upasarga」

⁹【本文の解説】上述の反論に対し、ナーゲージャは以下のように回答する。

動詞語根は多くの意味を内包しており、「upasarga」は動詞語根がその多数の意味のうちどの意味を表示するかを限定するためのものである。そのため、動詞語根は「upasarga」よりも先に行為実現要素を表示する接辞と結合することができる。動詞語根が意味する行為は実現されるべきものであり、まず行為実現要素を期待する。このことが動詞語根が先ず行為実現要素を表示する接辞と結合する理由である。動詞語根が先ず行為実現要素を表示する接辞と結合し、その後で「upasarga」と結合するのは、「upasarga」が標示する動詞語根の意味を聞き手に理解させるためである。

ナーゲージャの分析によれば、*anubhūyate* の派生は以下ようになる。

【*anubhūyate* の派生：2】

- | | | | |
|----------------|--------------|--------------------------|--------------------|
| (1) | <i>bhū</i> | + <i>IAṬ</i> | P.3.2.123 |
| (2) | <i>bhū</i> | + <i>ta</i> | P.3.4.78, P.1.3.13 |
| (3) <i>anu</i> | + <i>bhū</i> | + <i>ta</i> | |
| (4) <i>anu</i> | + <i>bhū</i> | + <i>te</i> | P.3.4.79 |
| (5) <i>anu</i> | + <i>bhū</i> | + <i>yaK</i> + <i>te</i> | P.3.1.67 |

anubhūyate

[派生説明]

(1) の段階で P.3.2.123 により現在接辞 *IAṬ* が導入される。(2) の段階で P.3.4.78 と P.1.3.13 により、*IAṬ* に、「ātmanepada」の代置要素である *ta* が代置される。(3) の段階で動詞語根 *bhū* が「upasarga」である *anu* と結合される。(4) の段階で P.3.4.79 により「ātmanepada」の最後の母音に *e* が代置される。(5) の段階で P.3.1.67 により行為の目的を表示する「sārvadhātuka」*te* が後続している *bhū* の後に *yaK* がおこり、*anubhūyate* が派生される。

【関連規則】は【*anubhūyate* の派生：1】参照。

を根拠とする *sUT* [の附加] が重複 (dvitva) などに先行して適用され、その後で重複などが [適用される] ¹⁰。

【2.3.2.2.1.4. 行為実現要素を表示する接辞を根拠とする操作が *antaraṅga* であることを証明す

¹⁰ 【本文の解説】下の派生の (7) の段階で適用されている P.6.1.8 による重複は行為実現要素を表示する接辞である *atus* を根拠としている。一方で (6) の段階で適用されている P.6.1.137 による *sUT* の附加は「*upasarga*」が表示する意味を根拠としているので、P.6.1.137 の方が P.6.1.8 より *antaraṅga* であり、先に適用される。

【*saṃcaskāra* の派生】

- | | | |
|------|--|--------------------|
| (1) | <i>kṛ</i> + <i>UIT</i> | P.3.2.115 |
| (2) | <i>kṛ</i> + <i>tiP</i> | P.3.4.78 |
| (3) | <i>sam</i> + <i>kṛ</i> + <i>ti</i> | |
| (4) | <i>sam</i> + <i>kṛ</i> + <i>NaL</i> | P.3.4.82 |
| (5) | <i>sam</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.7.3.84, P.1.1.51 |
| (6) | <i>sam</i> + <i>s</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.6.1.137 |
| (7) | <i>sam</i> + <i>skṛ</i> + <i>s</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.6.1.8, P.1.1.59 |
| (8) | <i>sam</i> + <i>kṛ</i> + <i>s</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.7.4.61 |
| (9) | <i>sam</i> + <i>kar</i> + <i>s</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.7.4.66, P.1.1.51 |
| (10) | <i>sam</i> + <i>ka</i> + <i>s</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.7.4.60 |
| (11) | <i>sam</i> + <i>ca</i> + <i>s</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.7.4.62 |
| (12) | <i>sam</i> + <i>ca</i> + <i>s</i> + <i>kār</i> + <i>a</i> | P.8.3.24 |
- saṃcaskāra*

【派生説明】

(1) の段階で過去接辞 *UIT* が導入される。(2) の段階で P.3.4.78 により *UIT* に三人称単数「*parasmaipada*」の代置要素である *tiP* が代置される。(3) の段階で動詞語根 *skṛ* が「*upasarga*」*sam* と結合される。(4) の段階で P.3.4.82 により *UIT* の代置要素である *tiP* の代わりに *NaL* が代置される。(5) の段階で P.7.3.84 により *NaL* が後続している *kṛ* の *r* に「*guṇa*」*ā* が代置され、*ā* の後に P.1.1.51 により *r* が起こる。(6) の段階で P.6.1.137 により *sam* に後続している *kṛ* に附加辞 *sUT* が起こる。(7) の段階で P.6.1.8 により、動詞語根の第一音節が繰り返される。(8) の段階で P.7.4.61 により「*abhyāsa*」である *skṛ* の *k* は *śaR* である *s* が先行する *khaY* であるので残存し、*s* は脱落する。(9) の段階で P.7.4.66 により「*abhyāsa*」の最終要素である *kṛ* の *r* に *a* が代置され *ka* となり、*a* の後に P.1.1.51 により *r* が起こる。(10) の段階で P.7.4.60 により、「*abhyāsa*」である *kar* の最初の子音である *k* は残存し、*r* は脱落する。(11) の段階で P.7.4.62 により *k* 系列音である「*abhyāsa*」*ka* の *k* に *c* 系列音である *c* が代置される。(12) の段階で P.8.3.24 により *jhaL* が後続する *m* に「*anusvāra*」が代置され、*saṃcaskāra* が派生される。

【関連規則】

P.3.2.115 *parokṣe liṭ* // (「発話している日を除く過去に属し、話者によって目撃されていない行為を表示する動詞語根の後に *UIT* 接辞が起こる」)

P.3.4.78 *tiptasjihisipthasthamibvasmastātāmjhathāsāthāmdhvamiḍvāhimahiṇ* // (「*L* 音の代わりに、*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*, *āthām*, *dhvam*, *iṭ*, *vahi*, *mahiṇ* という代置要素が起こる」)

P.3.4.82 *parasmaipadānām ṇalatususthalathusaṇalvamāḥ* //

る具体例】

ata eva praṇidāpayatītyādau ṇatvaṃ yad āgamāḥ iti nyāyena samāhitam bhāṣye // ata eva pratyeti pratyaya ityādi siddhiḥ / anyathāntaraṅgatvāt savarnadīrghe rūpāsiddhiḥ //

まさにこのことから、[P.1.1.20 に対する] *Bhāṣya* において、*praṇidāpayati* (*pra-ni-dā-NiC* 「与えさせる」, 3rd. sg. pres. P) などの事例¹¹ に

(「*UIT*」の代置要素である「*parasmaipada*」である *tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas* の代わりに、それぞれ *NaL*, *atus*, *us*, *thaL*, *athus*, *a*, *NaL*, *va*, *ma* という代置が起こる」)

P.7.3.84 *sārvadhātukārdhadhātukayoḥ* // (「*sārvadhātuka*」と「*ārdhadhātuka*」が後続するとき *iK* で終わる「*aṅga*」の *iK* の代わりに「*guṇa*」が起こる」)

P.1.1.51 *ur aṅ raparaḥ* // (「*r*」に代置される *aṅ* は *r* を後続する」)

P.6.1.137 *samparyupebhyah karotau bhūṣaṇe* // (「*sam*, *pari*, *upa* に、装飾を意味する *kṛ* が後続するとき、*k* の前に *sUT* が起こる」)

P.6.1.8 *liṭi dhātor anabhyāsasya* // (「*UIT*」が後続するとき、「*abhyāsa*」でない動詞語根の最初の音節、あるいは二番目の音節に重複が起こる」)

P.7.4.61 *śarpūrvāḥ khayah* // (「*śaR*」が先行する「*abhyāsa*」の *khaY* 以外の子音は脱落する」)

P.7.4.66 *ur at* // (「*r*」を最終要素として持つ「*abhyāsa*」の代わりに *a* が起こる」)

P.7.4.60 *halādih śeṣah* // (「*abhyāsa*」の最初でない子音は脱落する」)

P.7.4.62 *kuhoś cuḥ* // (「*abhyāsa*」の *k* 系列音と「*abhyāsa*」の *h* の代わりに *c* 系列音が起こる」)

P.8.3.24 *naś cāpadāntasya jhali* // (「*jhaL*」が後続するとき、「*pada*」の最終要素でない *n* と *m* の代わりに「*anusvāra*」が起こる」)

¹¹ 【*praṇidāpayati* の派生】

- | | | | |
|-----|------------------------------------|-------------------------|---|
| (1) | <i>dā</i> | + <i>NiC</i> | P.3.1.26 |
| (2) | <i>dā</i> | + <i>i</i> | + <i>IAṬ</i> P.3.2.123 |
| (3) | <i>dā</i> | + <i>i</i> | + <i>tiP</i> P.3.4.78 |
| (4) | <i>pra</i> + <i>ni</i> + <i>dā</i> | + <i>i</i> | + <i>tiP</i> |
| (5) | <i>pra</i> + <i>ni</i> + <i>dā</i> | + <i>i</i> | + <i>śaP</i> + <i>ti</i> P.3.1.68 |
| (6) | <i>pra</i> + <i>ni</i> + <i>dā</i> | + <i>pUK</i> + <i>i</i> | + <i>a</i> + <i>ti</i> P.7.3.36 |
| (7) | <i>pra</i> + <i>ni</i> + <i>dā</i> | + <i>p</i> | + <i>e</i> + <i>a</i> + <i>ti</i> P.7.3.84 |
| (8) | <i>pra</i> + <i>ni</i> + <i>dā</i> | + <i>p</i> | + <i>ay</i> + <i>a</i> + <i>ti</i> P.6.1.78 |
| (9) | <i>pra</i> + <i>ni</i> + <i>dā</i> | + <i>p</i> | + <i>ay</i> + <i>a</i> + <i>ti</i> P.8.4.17 |
- praṇidāpayati*

【派生説明】

(1) の段階で P.3.1.26 により動詞語根 *dā* の後に使役接辞 *NiC* が導入される。(2) の段階で P.3.2.123 により現在接辞 *IAṬ* が導入される。(3) の段階で P.3.4.78 により *IAṬ* に三人称単数「*parasmaipada*」の代置要素である *tiP* が代置される。(4) の段階で動詞語根 *dā* と「*upasarga*」である *pra* と *ni* が結合される。(5) の段階で P.3.1.68 により行為主体を表示する「*sārvadhātuka*」*ti* が後続している動詞語根の後に *śaP* が起こる。(6) の段階で P.7.3.36 により *NiC*

おける *n* 音代置 [が起こらないのではないかという疑念] が解釈規則「x に関して附加辞 (āgama) が規定されているとき、[その附加辞は] その x に従属するものであるから、x の言及によって理解される」(PIS11: yadāgamās tadguṇīhūtās tadgrahaṇena grhyante) という道理によって答えられている¹²。

が後続している *dā* に附加辞 *pUK* が起こる。(7) の段階で P.7.3.84 により「ārdhadhātuka」が後続する「aṅga」*dāpi* の *i* に「guṇa」が代置される。(8) の段階で P.6.1.78 により *a* が後続している *e* に *ay* が代置される。(9) の段階で P.8.4.17 により *dā* が後続している「upasarga」*ni* の *n* に *n* が代置され、*praṇidāpayati* が派生される。

【関連規則】

P.3.1.26 hetumati ca // (「使役者 (hetu) の働きが表示されるべきとき、動詞語根の後に *NiC* 接辞が起こる」)

P.3.2.123 vartamāne lat // (「現在に属する行為を表示する動詞語根の後に *IAṬ* 接辞が起こる」)

P.3.4.78 tiptasjhisiphasthamibvasmastātāmjhathāsāthām-dhvamiḍvahiṃ // (「*L* 音の代わりに、*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*, *āthām*, *dhvam*, *iṬ*, *vahi*, *mahiN* という代置が起こる」)

P.3.1.68 kartari śap // (「行為主体を表示する「sārvadhātuka」が後続するとき、動詞語根の後に *śaP* 接辞が起こる」)

P.7.3.36 artihriṅvīrīknūyīkṣmāyātām pugṇau // (「*Ni* が後続するとき、*r*, *hrī*, *vī*, *rī*, *knuy*, *kṣmāy* あるいは *ā* 音を最終要素として *m* 「aṅga」に附加辞 *pUK* が起こる」)

P.7.3.84 sārvaadhātukārdhadhātukayoḥ // (「sārvaadhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき *iK* で終わる「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」が起こる」)

P.6.1.78 eco 'yavāyāvaḥ // (「*eC* に母音が後続するとき、*eC* の代わりにそれぞれ *ay*, *av*, *āy*, *āv* が起こる」)

P.8.4.17 ner gadanadapatapadaghumāsyatihantiyātivātīdrātip-sātivapativahatiśāmyaticinotidegdiṣu ca // (「*gad*, *nad*, *pat*, 「*ghu*」と呼ばれる動詞語根、*mā*, *sya*, *han*, *yā*, *vā*, *drā*, *psā*, *vap*, *vah*, *sām*, *ci*, *dih* が後続するとき、「upasarga」にある根拠 (*r*, *s*) の後続要素である *ni* の *n* の代わりに *n* が起こる」)

P.1.1.20 dādhā ghu adāp // (「*dāp*, *daip* という動詞語根を除いて、*dā* あるいは、*dhā* という形を持つ動詞語根は「*ghu*」という術語で呼ばれる」)

¹² 【本文の解説】 P.1.1.20 に対する Bhāṣya でパタンジャリは次のような問題を提起する。

MBh on P.1.1.20 (I. 75.3-8): yady evam ihāpi tarhi na prāpnoti / praṇidāpayati praṇidhāpayatīti / atrāpi naitau dādhāv arthavantau nāpy etau dādhau prati kriyāyogaḥ // (「もしそうなら、その場合次の事例、すなわち *praṇidāpayati*, *praṇidhāpayati* においても [P.8.4.17 による *ni* の *n* 音に対する *n* 音代置は] 結果しない。これらにおいても、これら *dā* と *dhā* は意味を有するものではなく [、したがって「*ghu*」と呼ばれ得ず、これら *dā* と *dhā* に関して [「upasarga」術語規定の条件で

まさにこのことから、*pratyeti* (*prati-i* 「理解する」, 3rd. sg. pres. P.)¹³、*pratyaya* 「認識」など [の語形] が確立される。そうでなければ [「upasarga」を根拠とする操作が] antaraṅga であるので P.6.1.101 *akāḥ savarṇe dīrghaḥ* [が適用ある] 行為との結合も成立しない [。したがって *ni* は「upasarga」と呼ばれ得ない])

この問題に対する解決法がカーティアヤーナの *vārttika* として提示される。

vt. 5: na vārthavato hy āgamas tadguṇībhūtas tadgrahaṇena grhyate yathānyatra //

(「あるいはこのような困難は起こらない。なぜなら、有意味な項目に附加される附加辞は、その有意味項目に従属するから、その有意味項目の言及によって理解されるからである。他の [*iṬ* 附加辞の場合のように])

n 音代置の解釈規則による正当化の議論とはまさにこの一連の P.1.1.20 に対する Bhāṣya の議論である。

もし動詞語根が接辞より先に「upasarga」と結合するのであれば、*dā* は *pUK* 付加の根拠である使役接辞 *NiC* より先に「upasarga」である *pra* と *ni* に結合することになる。その場合、「upasarga」を根拠とする P.8.4.17 の *n* 音代置操作が使役接辞を根拠とする *pUK* 付加に対して antaraṅga であり、先に適用されることになる。したがって、上に示した Bhāṣya の議論はなされる必要がないことになる。この Bhāṣya の議論は、パタンジャリも動詞語根は「upasarga」よりも先に行為実現要素を表示する接辞と結合すると考えていることを示唆する。

¹³ 【*pratyeti* の派生】

- | | | |
|-----|-------------------------------------|-----------|
| (1) | <i>i</i> + <i>IAṬ</i> | P.3.2.123 |
| (2) | <i>i</i> + <i>tiP</i> | P.3.4.78 |
| (3) | <i>e</i> + <i>ti</i> | P.7.3.84 |
| (4) | <i>prati</i> + <i>e</i> + <i>ti</i> | |
| (5) | <i>praty</i> + <i>e</i> + <i>ti</i> | P.6.1.77 |
- pratyeti*

【派生説明】

(1) の段階で P.3.2.123 により動詞語根 *i* に現在接辞 *IAṬ* が導入される。(2) の段階で P.3.4.78 により *IAṬ* に三人称単数の代置要素である *tiP* が代置される。(3) の段階で P.7.3.84 により「sārvaadhātuka」である *tiP* が後続する *i* に「guṇa」が代置される。(4) の段階で動詞語根 *i(e)* が「upasarga」である *prati* と結びつく。(5) の段階で P.6.1.77 により母音 *e* が後続する *prati* の *i* の代わりに *y* が起こり、*pratyeti* が派生される。

【関連規則】

P.3.2.123 vartamāne lat // (「現在に属する行為を表示する動詞語根の後に *IAṬ* 接辞が起こる」)

P.3.4.78 tiptasjhisiphasthamibvasmastātāmjhathāsāthām-dhvamiḍvahiṃ // (「*L* 音の代わりに、*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*, *āthām*, *dhvam*, *iṬ*, *vahi*, *mahiN* という代置が起こる」)

P.7.3.84 sārvaadhātukārdhadhātukayoḥ // (「sārvaadhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき *iK* で終わる「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」が起こる」)

される]場合に語形が成立しない¹⁴。

【2.3.2.2.1.5. 「upasarga」を根拠とする操作と行為実現要素を根拠とする操作に関する antaraṅga 性の総括】

yad upasarganimittakaṃ kāryam upasargārthāśritam viśiṣṭopasarganimittatvāt tad antaraṅgam / yat tu na tathā tatra pūrvāgatasādhananimittakam evāntaraṅgam / ata eva na dhātu (P.1.1.4) iti sūtre preddha ity atra guṇo bahiraṅga iti bhāṣya uktam // kiṃca pūrvam upasargayoge dhātūpasargayoḥ samāsa aikasvādyāpattir ity upapadam atiṅ (P.2.2.19) iti sūtre bhāṣye spaṣṭam //

「upasarga」の意味に依拠するとき、「upasarga」を根拠とする操作は antaraṅga である。なぜなら、「upasarga」を特定するもの[すなわち動詞語根]を根拠とするものであるからである。一方、そのようではないもの[すなわち、「upasarga」の意味を根拠とするもの以外の「upasarga」を根拠とする文法操作]に関しては、まさに先に理解される実現要素[を表示する接辞]を根拠とする[操作]が antaraṅga である。まさにこのことから P.1.1.4 na dhātulopa ārdhadhātuke に関する Bhāṣya において次のように述べられている。

「preddha (pra-indh-Kta「点火された」, past participle)¹⁵というこの[事例]において「guṇa」

P.6.1.77 iko yaṅ aci // (「母音が後続するとき、iK の代わりに半母音が起こる」)

P.6.1.101 akaḥ savarṇe dīrghaḥ // (「aK に同類音である母音が後続するとき、先行要素の aK と後続要素の母音の代わりに「dīrgha」が唯一代置される」)

¹⁴【本文の解説】もし動詞語根が接辞より先に「upasarga」と結びつくのであれば、pratyeti の派生は以下ようになる。

- | | | | |
|-----------|---|-----|-----------|
| (1) prati | + | i | |
| (2) pratī | | | P.6.1.101 |
| (3) pratī | + | IAṬ | P.3.2.123 |
| (4) pratī | + | tiP | P.3.4.78 |
| (5) prate | + | ti | P.7.3.84 |
- prateti

この派生の(2)の段階で、P.6.1.101によってまず *prati* の *i* と動詞語根の *i* に「dīrgha」が代置されるので正しい語形が派生されない。このことから、動詞語根はまず接辞と結びついてその後「upasarga」と結びつくことが正しい順序であるとナーゲーシャは考えている。

¹⁵【preddha の派生】

代置は bahiraṅga である」¹⁶ さらに、P.2.2.19 upapadam atiṅ に関する[以下の] Bhāṣya においても[動詞語根が「upasarga」よりも先に行為実現要素を表示する接辞と結合することは]明

- | | | | |
|-----------|---|------------|----------|
| (1) pra | + | indh + Kta | |
| (2) pra | + | idh + ta | P.6.4.24 |
| (3) predh | | + ta | P.6.1.87 |
| *(3) pra | + | edh + ta | P.7.3.86 |
| *(3) pra | + | idh + ta | P.1.1.5 |
| (4) predh | | + dha | P.8.2.40 |
| (5) pred | | + dha | P.8.4.53 |
- preddha

【派生説明】

(1)の段階で P.3.2.188 により動詞語根 *indh* に *Kta* が導入される。(2)の段階で P.6.4.24 により *Kta* が後続する動詞語根の「upadhā」*indh* の *n* が脱落する。(3)の段階で P.6.1.87 により *pra* の *a* とそれに後続する *idh* の *i* の両者に「guṇa」が唯一代置される。(4)の段階で P.8.2.40 により *jhaṣ* である *predh* の *dh* に後続する *t* に *dh* が代置される。(5)の段階で P.8.4.53 により *dh* が後続している *dh* に *d* が代置され、*preddha* が派生される。

【関連規則】

P.3.2.102 niṣṭhā // (「動詞語根の後に過去を表示する「niṣṭhā」と呼ばれる接辞が起こる」)

P.6.4.24 aniditām hala upadhāyāḥ knīti // (「*K* と *N* を *it* としてもつ接辞が後続するとき *i* を *it* として持たない *haL* で終わる「āṅga」の「upadhā」である *n* が脱落する」)

P.6.1.87 ād guṇaḥ // (「*a* 音に母音が後続するとき、その先行する *a* 音と後続する母音の代わりに、「guṇa」が唯一代置される」)

P.8.2.40 jhaṣas tathor dho 'dhaḥ // (「動詞語根 *dhā* の場合を除いて、*jhaṣ* の後続要素である *t* と *th* の代わりに *dh* が起こる」)

P.8.4.53 jhalām jaś jhaśi // (「*jhaṣ* が後続するとき *jhaL* の代わりに *jaṣ* である代置要素が起こる」)

P.7.3.86 pugantalaghūpadhasya ca // (「「sārvadhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき、「āṅga」に含まれる *pUK* の先行要素である *iK* の代わりに、あるいは、「āṅga」の「laghu」である「upadhā」である *iK* の代わりに「guṇa」が起こる」)

¹⁶【本文の解説】*preddha* の派生の(3)の段階で P.6.1.87 による *a* と *i* に対する「guṇa」の唯一代置と P.7.3.86 による「āṅga」の「upadhā」である *i* に対する「guṇa」代置が適用可能である。また、後者は *K* を *it* として持つ *Kta* を根拠とする操作であるので、P.1.1.5 による「guṇa」代置の禁止も適用可能となる。これらの操作のうち、P.7.3.86 による「guṇa」代置と P.1.1.5 による「guṇa」代置の禁止は行為実現要素を表示する接辞である *Kta* を根拠としている。一方で P.6.1.87 による「guṇa」代置は「upasarga」である *pra* の *a* と *indh* の *i* を根拠とする。したがってこの場合、P.7.3.86 による「guṇa」代置と P.1.1.5 による禁止規則が P.6.1.87 による「guṇa」代置に対して antaraṅga

らかである¹⁷。

「[動詞語根が] 先に「upasarga」と結合するとするならば、動詞語根と「upasarga」が複合語を形成することになり、アクセントの単一性等が帰結する」

【2.3.2.2.2. 「upasarga」-動詞語根-行為を表示する接辞】

bhāvārthapratyayasyāpi pūrvam evotpattiḥ /
ata eva ṇer adhyayane (P.7.2.26) iti nirdeśaḥ
saṃgacchate / idaṃ ca sāmānyāpekṣaṃ jñāpakam
bhāvatiṇo 'pi pūrvam utpatteḥ / anyathā tatra
samāsāpattiḥ / tiṇi tv atinṇ iti niṣedhān na doṣo
yadi bhāvatiṇy upasargayogo 'stīty alam //

ということになる。それゆえ、P.7.3.86 による「guṇa」代置が適用可能であるとき、行為実現要素を表示する接辞を根拠とする「guṇa」代置の禁止が「upasarga」を根拠とする P.6.1.87 による「guṇa」代置より先に適用され、その後で P.6.1.87 による「guṇa」代置が適用される。このことを意図して P.1.1.4 に関する Bhāṣya において次のように述べられている。

MBh on P.1.1.4 (I. 51.8-9): katham upeddhaḥ preddha iti / bahiraṅgo guṇo 'ntaraṅgaḥ pratiśedhaḥ /
「どのようにして upeddhaḥ, preddhaḥ という語形が成立するのか。[P.6.1.87 による] 「guṇa」代置が bahiraṅga であり、禁止規則が antaraṅga である」

このことから、パタンジャリが、動詞語根は「upasarga」よりも先に行為実現要素を表示する接辞と結合すると考えていることがわかる。

¹⁷P.2.2.19 に関する Bhāṣya においてパタンジャリは以下のように述べている。

MBh on P.2.2.19 (I. 417.21-24): yady evaṃ dhātūpasargayor api samāsaḥ prāpnoti pūrvam dhātur upasargeṇa yujyate paścāt sādhaneneti / naitad asti / pūrvam dhātuḥ sādhanena yujyate paścāt upasargeṇa / sādhanam hi kriyāṃ nirvarttayati tām upasargo viśinaṣṭi / abhinirvṛttasya cārthasyopasargeṇa viśeṣaḥ śakyo vaktum //

「もしこのように [意味的なつながりをもつ二つの「pada」が複合語をつくる] なら、動詞語根と「upasarga」に関しても複合語を形成することになってしまう。動詞語根は先に「upasarga」と結合し、のちに sādhanā と結合すると考えられるから」

【関連規則】

P.6.1.158 anudāttaṃ padam ekavarjam // (「pada」の母音は一つを除いてすべて「anudātta」である)

P.6.1.127 iko 'savarṇe śākalyasya hrasvaś ca // (「Śākalya 先生の考えによると、iK の後に同類音でない母音が後続するとき、その iK の代わりに「hrasva」が起こる」)

行為を意味する接辞もまさに [「upasarga」よりも] 先に生起する。まさにこのことから、P.7.2.26 ṇer adhyayane vṛttam [中の adhyayana (「学習」) という語形の] 教示には整合性がある¹⁸。そしてこの [教示された adhyayana という語形] は、[接辞] 一般を期待して [動詞語根のいかなる接辞との結合も「upasarga」に先行するということを] 知らしめる指標である¹⁹。なぜなら、行為を [表示する] tiN 接辞

¹⁸P.7.2.26 ṇer adhyayane vṛttam // (「Ni を最終要素としてもつ vṛt に「niṣṭhā」が起こるとき、「学習」の意味で vṛtta という語が派生される」)

¹⁹【adhyayana の派生】

- | | | | | | | | |
|-----|-------------|----------|---|-------------|------------------|------------|----------|
| (1) | | <i>i</i> | + | <i>Lyuṭ</i> | P.3.3.113 | | |
| (2) | | <i>i</i> | + | <i>ana</i> | P.7.1.1, P.1.3.8 | | |
| (3) | <i>adhi</i> | + | | <i>i</i> | + | <i>ana</i> | |
| (4) | <i>adhi</i> | + | | <i>e</i> | + | <i>ana</i> | P.7.3.84 |
| (5) | <i>adhi</i> | + | | <i>ay</i> | + | <i>ana</i> | P.6.1.78 |
| (6) | <i>adhy</i> | + | | <i>ay</i> | + | <i>ana</i> | P.6.1.77 |
- adhyayana*

【派生説明】

(1) の段階で P.3.3.113 により行為を表示する接辞である *Lyuṭ* が導入される。(2) の段階で P.7.1.1 により *Lyuṭ* に *ana* が代置される。(3) の段階で動詞語根が「upasarga」である *adhi* と結合する。(4) の段階で P.7.3.84 により「ārdhadhātuka」が後続している *i* の代わりに「guṇa」が起こる。(5) の段階で P.6.1.78 により *a* が後続する *e* に *ay* が代置される。(6) の段階で P.6.1.77 により *a* が後続している *adhi* の *i* に *y* が代置され、*adhyayana* が派生される。

もし動詞語根が行為を意味する接辞に先行して「upasarga」と結合するのであれば、*adhi* の *i* と動詞語根 *i* の *i* の両者に P.6.1.101 により「dīrgha」代置が結果してしまう。その場合 *adhyayana* という語形は派生されなくなる。しかし、パーニニが P.7.2.26 ṇer adhyayane vṛttam の中で行為名詞である *adhyayana* という語形を提示していることは、行為を意味する接辞に関しても「upasarga」に先行して動詞語根と結合することを示している。

【関連規則】

P.3.3.113 krtyalyuṭo bahulam // (「krtya」という術語で呼ばれる接辞と *Lyuṭ* 接辞は様々な意味で起こる」)

P.7.1.1 yuvor anākau // (「yU 接辞と vU 接辞の代わりに、それぞれ *ana*, *aka* が起こる」)

P.1.3.8 laśakv ataddhite // (「taddhita」以外の接辞の最初に起こる *l* 音、*ś* 音、*k* 系列音が「it」という術語で呼ばれる」)

P.7.3.84 sārva dhātukārdhadhātukayoḥ // (「sārva dhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき *iK* で終わる「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」が起こる」)

P.6.1.78 eco ayavāyāvah // (「eC に母音が後続するとき、*eC* の代わりに、それぞれ *ay*, *av*, *āy*, *āv* が起こる」)

P.6.1.77 iko yaṅ aci // (「母音が後続するとき、*iK* の代わりに半母音が起こる」)

も[「upasarga」よりも]先に生起するからである。もしそうでないとするならば、その場合、[動詞語根と「upasarga」が]複合語を形成することになるであろう。しかしながら、行為を表示する *tiN* 接辞が後続する場合には[動詞語根は先に]「upasarga」と結合するとしても、*tiN* 接辞で終わる項目に関しては、[複合語形成が P.2.2.19 の]「*tiN* 接辞で終わる項目を除き」というように禁止されるから、[動詞語根と「upasarga」の複合語形成という]誤謬は起らない²⁰。

以上この問題に関する議論はこれまでとする。

(未完)

略号及び参考文献

MBh *The Vyākaraṇa-Mahābhāṣya of Patañjali*, 3vol.
Ed. by F. Kielhorn. Forth edition by Abhyankar

²⁰【本文の解説】ナーゲーシャによれば、パーニニの P7.2.26 における行為名詞 *adhyayana* の語形提示は、動詞語根は接辞一般に対して「upasarga」に先行して結合することを示唆する。行為 (*bhāva*) を表示する接辞の場合のその行為 (*bhāva*) とは、動詞語根の意味に他ならず、意味の観点からすると、動詞語根と「upasarga」の結合が動詞語根と行為 (*bhāva*) を表示する接辞との結合に優先するようと思われる。しかしパーニニは、行為 (*bhāva*) を表示する接辞の場合を含め、動詞語根の後に起こる如何なる接辞も、「upasarga」に優先して動詞語根と結合すると考えているのである。

ここで反論が提起される。行為 (*bhāva*) を表示する接辞でも「*kr̥t*」接辞ではなく、定動詞接辞 (*tiN*) の場合には動詞語根は「upasarga」に優先的に結合するのではないかというものである。しかし、もし動詞語根が行為を表示する *tiN* 接辞より先に「upasarga」と結合するとすれば、動詞語根と「upasarga」が複合語を作ってしまう。一方で、動詞語根が「upasarga」より先に行為を表示する *tiN* 接辞と結合する場合には、P.2.2.19 の *tiN* 接辞で終わる語形は意味的につながりのある語形とは複合語を形成できないという禁止によって、問題の動詞語根と「upasarga」の複合語形成という望ましくない帰結はない。このことから、行為 (*bhāva*) を表示する *tiN* 接辞の場合に、動詞語根がその接辞に先行して「upasarga」に結合することは明らかである。それがパーニニの P.7.2.26 における行為名詞 *adhyayana* の使用が示唆することである。

【関連規則】

P.2.2.19 *upapadam atin* // (「*tiN* 接辞で終わる語形ではない「*upapada*」は意味的つながりのある別の語形と複合語を形成し、その複合語は「*tatpuruṣa*」と呼ばれる))

K. V. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962-72.

PIŚ Nāgeśabhaṭṭa's *Paribhāṣenduśekhara*. See abhyankar 1962.

vt Kātyāyana's *Vārttika*. See MBh.

Abhyankar, K. V.

1960 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa*. Pt. 2, edited and explained by Kielhorn F. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. (2nd. ed.)

1962 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa*. Pt. 1, edited critically with the Commentary *Tattvadarśa* of MM. Vasudev Shastri Abhyankar. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. (2nd. ed.)

Bronkhorst, Johannes

1986 *Tradition and Argument in Classical Indian Linguistics: The Bhirāṅga-paribhāṣā in the Paribhāṣenduśekhara*. Dordrecht, Boston, Lancaster, Tokyo: D.Reidel Publishing Company.

Cardona, George

1970 "Some principles of Pāṇini's grammar," *Journal of Indian Philosophy* 1: 40-74.

1988 *Pāṇini: His Work and its Traditions*. Vol.1. Delhi: Motil Banarsidass Publishers.

1989 "Pāṇinian studies," In *New Horizon of Research in Indology*, 49-84. Pune: University of Poona.

Kielhorn, L. F

1868 See Abhyankar 1962.

1874 See Abhyankar 1960.

間瀬 忍

2006a 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddham bahiraṅgam antaraṅge 研究(1)」(『比較論理学研究』第3号、pp. 89-99)

2006b 「『パリパーシェンドウシェーカラ』における内的要因操作性」(『哲学』第58集、pp. 111-123)

2007 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddham bahiraṅgam antaraṅge 研究(2)」(『比較論理学研究』第4号、pp. 81-91)

(ませ しのぶ、広島大学大学院
文学研究科博士課程後期 [インド哲学])